

Web講演 第1話 —— 勝五郎の「あの世」の旅 ——



今井秀和
(大東文化大学非常勤講師
蓮花寺佛教研究所研究員)

江戸時代に、生まれ変わりを果たしたという少年「勝五郎」が評判になった。勝五郎の転生をめぐる騒動は公的な文書に記録され、知識人たちの関心を集めた。具体的には文政5年(1822)のこと、武蔵国中野村に住む8歳の小谷田勝五郎^{こやたかつごろう}¹が突然、自分の前世は程窪村に住む須崎藤蔵^{すざきとうぞう}²だったこと、6歳の時に亡くなったことなどを語り始めたのである。

疱瘡で亡くなった藤蔵

江戸時代には、感染すると死に至ることも多い「疱瘡」^{ほうそう}³という流行り病があった。

とくに子どもの死亡率は高く、人々から非常に恐れられていた。程窪村の藤蔵もまた疱瘡にかかり、それが重症化して6歳の短い人生を閉じることになってしまった。

藤蔵の生まれ変わりだという勝五郎は次のように語った。藤蔵の意識は死んだ後も持続しており、早桶(棺桶)の中に死体が強く押し込まれた時、魂のみが身体を飛び出した。そのまま埋葬の様子を眺め、早桶が墓穴に落とされた際の「ドスン」という音も憶えているという。この時、泣いている母のもとに行きかけて話しかけたが、その声は母に届かなかった。

やがて藤蔵は、黒い着物を着て白髪を長く垂らした老人が自分を手招きしていることに気付く。そして、導かれるままに老人の後を追うと、見知らぬ高原をフワフワとさまよった。高原には色とりどりの花々が咲いていた。あちこち遊び回って、一体どれほどの時間が過ぎた頃だろうか、どこからか家族の声や念仏が聞こえてきた。藤蔵は声を辿って程窪村の家に帰ってみた。仏前に供えられた物は食べられなかったが、立ち昇る香りは美味に感じた。

やがて黒い着物の老人は藤蔵を連れて程窪村から中野村へと移動する。藤蔵は老人に指示された通り、一軒の家へ入ると、これから自分の両親となる夫婦の会話に耳を傾けていた。その内、いつの間にか藤蔵の魂は、母となる人の腹の中に入っていた。

生まれ変わりの噂

こうして程窪村の須崎藤蔵は、中野村の小谷田勝五郎として生まれ変わったという。程窪村で6歳の短い生涯を閉じた藤蔵の墓は、現在、高幡不動尊金剛寺境内の墓地にあり、参拝が可能である。明治2年(1869)に55歳で亡くなった勝五郎の墓も現存しており、今は、元あった場所から移転されて八王子市下柚木の永林寺境内の墓地にある。

勝五郎の生まれ変わりに関する噂話は、当時の人々の興味を引き、中野村や程窪村といっ

¹ 小谷田勝五郎 武蔵国中野村(現在の八王子市東中野)に住んでいた少年。

² 須崎藤蔵 武蔵国程窪村(現在の日野市程久保)に住んでおり、6歳で亡くなる。

³ 疱瘡 天然痘などの感染症。当時、天然痘による死亡率は非常に高かった。

た垣根を飛び越えて次第に大きな評判となっていた。この噂をいち早く聞きつけて勝五郎のもとを訪ねてきたのが、鳥取藩支藩の藩主を隠居した池田冠山^{かんざん} 4である。冠山の愛娘、露姫^{ろぎ} 5は疱瘡を患って6歳で亡くなっている。同じく疱瘡で6歳の生涯を閉じた藤蔵が勝五郎に生まれ変わったという話は、冠山にとって貴重なニュースだったのである。冠山による『勝五郎再生前生話』⁶は、江戸の知識人達に勝五郎の転生譚を広める契機ともなった。

騒ぎが大きくなってきた為、中野村を領地とする旗本の多門傳八郎^{おかとでんはちろう} 7は勝五郎と父の源蔵に真偽を質した上で公式文書を作成した。そして上司である御書院番頭^{ごしょいんばんがしら}に届け出た。これを機に勝五郎の噂は、更に多くの知識人達を巻き込んで広がっていくことになる。

「あの世」の探求

勝五郎が前世について語る数年前のこと。天狗に連れられて異世界へ行ったという少年「寅吉」^{とらきち}が、江戸の知識人たちの注目を集めた。国学者の平田篤胤^{あつたね} 8は、「幽冥界」^{ゆうめいがい} 9の実在を証明しようとしており、寅吉からの聞き書きを『仙境異聞』という書物にまとめた。

江戸後期には、古くからある日本の知識に加えて、海外、とくに西洋の最新情報が多く入ってくるようになる。国学者の本居宣長^{もとりのりなが}は太陽・地球・月を日本神話における天・地・泉^{あめ つち よみ}に重ね合わせて解釈する説を出していた。そして本居宣長の門人、服部中庸^{はっとりなかつね}はそこに西洋の天文学に基づく宇宙の知識を取り入れて「三大考」という書を作った。

この説に触れた篤胤も自らの著書で同様の説を展開する。さらに篤胤は、神々や死者の住む異世界（幽冥界）とこの世とが重なり合っているという説を唱えていた。篤胤はこうした説をどのように証明したらよいか悩んでいた。そこに、天狗の住む異世界へ行ったという寅吉や、前世や「あの世」の知識を持つという勝五郎が現れたのである。篤胤は彼らの語りを重要な「資料」と考えて、自らの説を証明・補強できると考えた。こうした篤胤の情熱の根底には、最初の妻や子を亡くしていたことも関わっていたものと思われる。

勝五郎と江戸の知識人

平田篤胤は勝五郎に強い興味を持ち、丹念な取材を行って『勝五郎再生記聞』¹⁰をまとめた。寅吉と勝五郎はどちらも平田篤胤の弟子になっていた時期があり、兄弟弟子というこ

4 池田冠山 松平冠山。鳥取藩支藩（後の若桜藩）藩主を隠居後、著述活動などを行う。

5 露姫 松平露。池田冠山の娘。疱瘡にかかり6歳で命を落とす。没後、年に似合わぬ達筆で書かれた様々な遺墨が見つかり、冠山や周囲の人々を驚かせた。

6 『勝五郎再生前生話』 池田冠山が、勝五郎が語った内容をその祖母から聞き出すなどしてまとめたもの。祖母が再演した勝五郎の語りは口語体で記されており、当時の農村に住む子どもの語りを知る上でも貴重である。

7 多門傳八郎 武蔵国中野村を領地とする旗本。

8 平田篤胤 本居宣長などの実証的な国学の影響を受けつつ、それとは異なる方向性の、証明しがたい「幽冥界」の探求にも力を注いだ国学者。

9 幽冥界 神々や死者などが住むと考えられていた世界。

10 『勝五郎再生記聞』 平田篤胤が勝五郎の転生に関する聞き取り調査に、産土神に関する説など、自分の考えを加えてまとめた書。

とになる。なお篤胤は、藤蔵の魂を案内した黒衣着物の老人を産土神^{うぶすなかみ} 11 だと考えていた。

ただし、勝五郎の転生に疑念を抱いていた人物もいる。肥前国平戸藩主を隠居した後、怪異・奇聞に属する記事を多く含んだ随筆『甲子夜話』を編んだ松浦静山^{まつら} 12 である。静山の住む江戸本所の下屋敷の隣家には、幕府天守番を勤める荻野梅塙^{おぎのぼし} 13 という人物が住んでいた。勝五郎が江戸の知識人達の注目の的となっていた文政6年のある日、中野村を領地とする旗本、多門傳八郎が荻野梅塙のもとに勝五郎を連れてきた。

梅塙は、親しい間柄であった静山に、勝五郎を見に来るよう誘うが、静山はこれを断っている。しかしこの時、屋敷の者を使いに出して、しっかりと記録はとらせているから、信じるかどうかは別として興味を持っていたことは確実である。また、彼らのほかにも多くの知識人が勝五郎に関する記録を残している。松浦静山の例をみても分かるように、勝五郎の生まれ変わりが取り沙汰された当時において、知識人達の態度は一定ではなかった。

「流行り病」と「子どもの死」

勝五郎の生まれ変わり騒動が広まっていく過程を整理してみよう。まず、勝五郎は生まれ変わりにまつわる記憶をきょうだいに語った。その後、勝五郎の家族、ついで藤蔵の家族という周囲の大人たちが勝五郎の語りを信じたことにより、勝五郎の転生は中野村・程窪村を中心に話題を集めることとなった。さらに、役人や江戸の知識人たちのネットワークを通じて、勝五郎の噂は江戸にまで広まっていくことになったのである。

いずれにせよ、勝五郎の生まれ変わりが人々に知られることになったことを考える上で重要なのは、藤蔵という少年、露姫という少女が、ともに疱瘡という流行り病にかかり、どちらも6歳で命を落としていたということである。池田冠山はその共通点に気づき、抑えることのできない関心を抱いたのだと思われる。

程窪村の藤蔵が中野村の勝五郎に生まれ変わったという多摩地域の噂話は、生まれ変わりを果たしたという勝五郎による語りがなければ生じなかった。そして、疱瘡にかかって6歳で亡くなったという藤蔵と露姫の共通点に気づいた池田冠山の積極的なはたらきがあったことにより、他の地域を巻き込む大きな話題となっていた。勝五郎の生まれ変わりに関する話の広まりには、「流行り病」、そして「幼い子どもの死」という、いつの世にあっても人の心を揺さぶる大きな問題が関わっていたのである。

参考文献：

『ほどくぼ小僧 勝五郎生まれ変わり物語 調査報告書』日野市郷土資料館、2015年。
今井秀和『異世界と転生の江戸 平田篤胤と松浦静山』白澤社、2019年。

11 産土神 その人が生まれた土地の守り神。

12 松浦静山 肥前国平戸藩主を隠居した後、大部の随筆『甲子夜話』を著した人物。文武両道に秀でており、怪異・妖怪に関する話も数多く収集していた。

13 荻野梅塙 幕府天守番。仏教、とくに天台宗に通じ、寛永寺の僧に仏学を講じていた。幅広い興味と交遊関係を持ち、天狗小僧寅吉、勝五郎の両方にも会っている。